

Title	紫煙と帝国 : アメリカ南部タバコ植民地の社会と経済
Author(s)	和田, 光弘
Citation	大阪大学, 2000, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/42858
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、 〈a href="https://www.library.osaka-u.ac.jp/thesis/#closed"〉 大阪大学の博士論文について 〈/a〉 をご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

氏名	和田光弘
博士の専攻分野の名称	博士(文学)
学位記番号	第15769号
学位授与年月日	平成12年11月6日
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当
学位論文名	紫煙と帝国 —アメリカ南部タバコ植民地の社会と経済—
論文審査委員	(主査) 教授 川北 稔 (副査) 教授 合阪 學 助教授 藤川 隆男

論文内容の要旨

本論文は、植民地時代アメリカ史において、ニューイングランド植民地などくらべて、従来、等閑視されがちであった南部タバコ植民地の視点から、植民地時代史の再構成をはかるものである。タバコ植民地のなかでも、ヴァージニアに比べて、いっそう注目されることの少なかったメリーランド植民地を主要な対象としている。A5版430頁を越え、4部10章からなる大作である。メリーランド史を中心にする中で、ヴァージニアに偏ることなく、イギリス第一帝国内ないし近代世界システムのなかでのタバコ植民地の位置を確定し、ひいては、第一帝国そのものの性格に迫ろうとするものである。この意味で、本論文は、一国史観に立つ「初期アメリカ史」的な見方を拒否し、イギリス帝国の一部としての植民地時代アメリカを見ようとする最近の大きな学界動向に棹さすものである。

序論に続いて、3章からなる第一部「タバコ植民地社会の展開」では、宗教史や政治史の観点も加えられてはいるが、何よりもまず、ケンブリッジ・グループ以来の歴史人口学や家族史の手法をふんだんに用いて、労働力の白人年季奉公人から黒人奴隷への転換を後づけている点に特徴がある。黒人奴隷の導入は、この地域の社会経済の構造を将来にわたって規定することになっただけに、ここでも最大の注意が払われている。

第二部「消費構造と衣食住」(4・5章)は、財産目録その他の史料によって、白人入植者の生活史が、数量化されたデータをもちいて克明に描かれる。植民地定住者たちの生活文化の「イギリス化(Anglicization)」という、近年のイギリス帝国史研究の最大の課題に応える、わが国では初めての本格的な試みである。第三部「植民地経済と奴隷制」(6・7章)は、計量経済史の手法を駆使し、タバコ経済の動向を詳細に分析している。そこから、メリーランドが他の12州とともに独立を志向するに至った経済的前提をさぐるものである。独立に向かう契機の問題は、最後の第四部「第一帝国の史的空間」(8-10章)で、さらに展開される。すなわち、ここでは、ニューファンランドおよびノースカロライナ両植民地をとりあげ、それらとの比較をつうじてメリーランド植民地の帝国内における位置の解明が試みられている。

論文審査の結果の要旨

研究史上、本書の長所といえる特徴は多いが、まず第一にあげるべきことは、本書が、タバコという「世界商品」

を手がかりに、メリーランド植民地をイギリス第一帝国の一部として分析したことである。このような帝国史という手法は、植民地としての歴史的経験をもつアメリカ史の研究においてこそ有益なはずである。ところが、伝統的な植民地時代史研究の多くが、現代のアメリカ合衆国を前提とした「初期アメリカ史」的な視点を脱することができないという現実もあるので、この点の意義はいかに強調しても、強調しすぎということはない。

たとえば、ケンブリッジ・グループによる歴史人口学は、一般に、13植民地が初めからイギリスないしヨーロッパから孤立的で、閉鎖的な社会であったとする「初期アメリカ史」的な傾向を強化する方向に作用したとみられているが、本論文にあっては、同グループの開発した手法をフルに活用しながら、閉鎖社会のモデルに陥ることなく、帝國的ないし世界的視野を保ちえているのは、見事な手腕というべきであろう。このように、近年の歴史研究の主要な手法を、いち早く取り入れていることは、本論文の大きな特徴となっているといえよう。計量経済史や歴史人口学ばかりでなく、記号論的な説明や言説分析などの手法も随所に用いられている。

こうした多彩な手法を駆使した本論文のなかでも白眉というべきは、17世紀末における労働力構成の転換、つまり白人年季奉公人から黒人奴隷への転換過程の分析である。人口・家族史の手法によって、当時、この植民地では、人口構成の自立化がほぼ達成されたことを証明し、同時に、計量史の手法によって、社会的流動性が急速に低下したことを確認して、この植民地が貧しい白人移民にとって、もはや「機会の土地」ではなくなったことを明らかにした。したがって、黒人奴隷の労働力への転換は必然であったことになる。

メリーランドという、従来等閑視されがちであった植民地に視座をすえて、イギリス第一帝国の動向を俯瞰しようとする本論文の試みは、第8章の「パンフレットのなかのメリーランド植民地」で、とくに明示的に展開されており、十分に成功しているものと判断する。ただ、本論文にも、あえてさらに望むべき点があるとすれば、最後に全体の総括があれば、いっそう議論が鮮明になったのではないかと思われる。たとえば、独立革命への展望は、タバコ経済の動向に即しては十分に語られているが、他の諸要因をふくめて総合的に再確認する部分があってもよかったのではないか、と思われる。

ただし、これらの点は欠陥というほどのものでもなく、本論文がもつ研究史上の画期的な意義を損なうものでは毛頭ない。よって、本研究科は、本論文を博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。